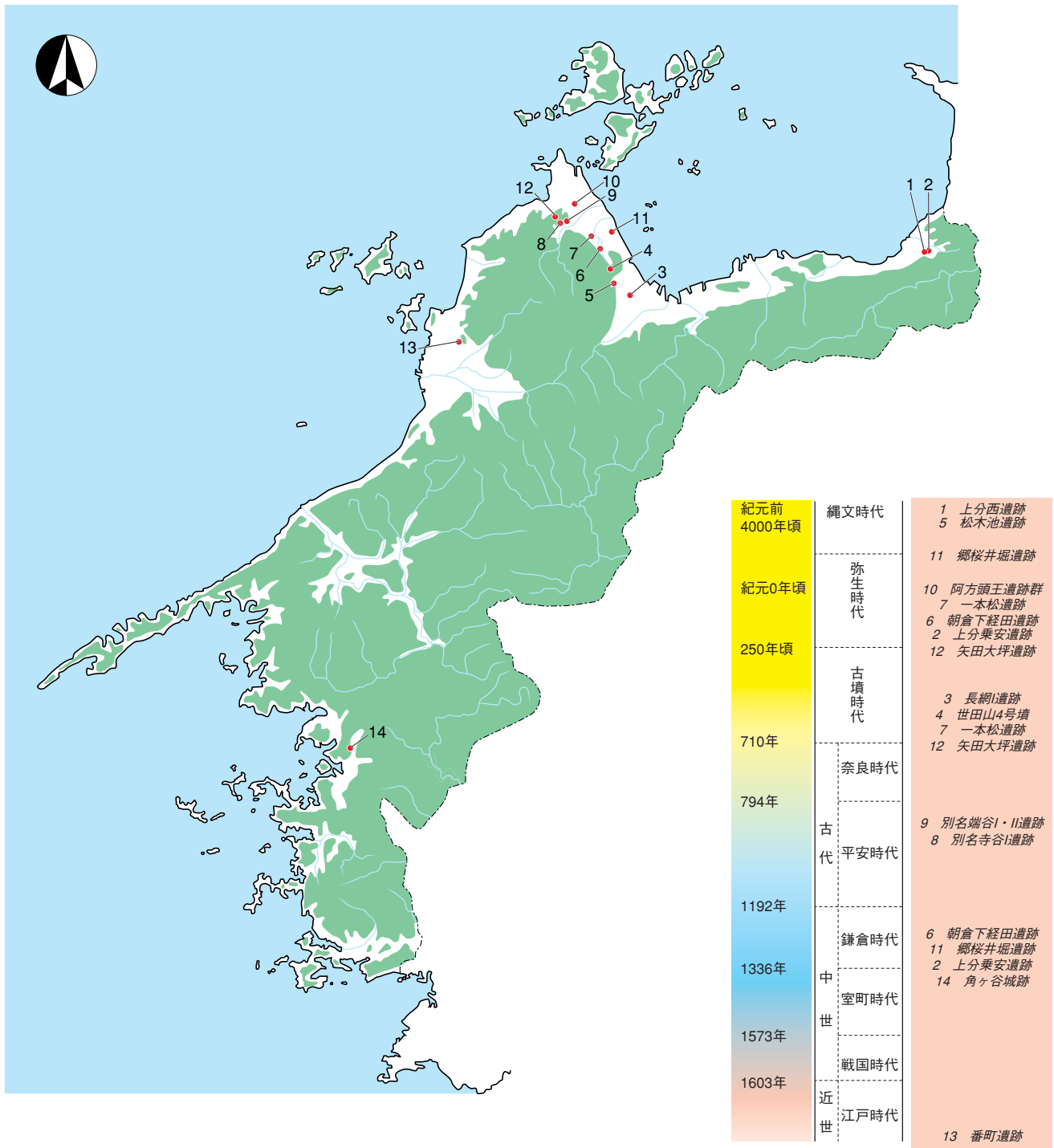


いにしへのツギハメ'07



朝倉下経田遺跡 弥生時代の柱穴に突き刺さっていた平形銅剣



展示遺跡一覧

地域	No.	遺跡名	所在地	調査期間	時代	事業者(調査原因)
東予	1	上分西遺跡	四国中央市上分町	2005. 4. 1 ~ 2006. 3.25	縄文時代～中世	国土交通省(国道11号川之江バイパス建設)
	2	上分乘安遺跡	四国中央市上分町	2006. 6.19 ~ 2007. 3.30	弥生時代～中世	国土交通省(国道11号川之江バイパス建設)
	3	長網I遺跡	西条市実報寺	1999. 9.20 ~ 2005.11.30	古墳時代	愛媛県(県道孫兵衛作壬生川線建設)
	4	世田山4号墳	西条市楠	2003.10. 1 ~ 2003.11.21	古墳時代	愛媛県(県道孫兵衛作壬生川線建設)
	5	松木池遺跡	西条市実報寺	2003. 9. 1 ~ 2003. 9.30	縄文時代	愛媛県(県道孫兵衛作壬生川線建設)
	6	朝倉下経田遺跡	今治市朝倉下	2005. 9. 6 ~ 2007. 3.23	弥生時代・中世	国土交通省(今治道路建設)
	7	一本松遺跡	今治市山口	2007. 1. 4 ~ 2007. 3.10	弥生・古墳時代	愛媛県(県道今治丹原線建設)
	8	別名寺谷I遺跡	今治市別名	2004.11. 1 ~ 2005.11.30	古代	都市再生機構(今治新都市建設)
	9	別名端谷I・II遺跡	今治市別名	2001. 2.17 ~ 2003. 1.17	古代	都市再生機構(今治新都市建設)
	10	阿方頭王遺跡群	今治市阿方	2002. 2.17 ~ 2003.11. 4	弥生時代	都市再生機構(今治新都市建設)
	11	郷桜井堀遺跡2次	今治市郷桜井	2006.10. 3 ~ 2006.10.31	弥生時代・中世	愛媛県(県道桜井山路線改良)
	12	矢田大坪遺跡	今治市矢田	2006.11. 6 ~ 2007. 3.20	古墳時代	愛媛県(県道今治丹原線建設)
中予	13	番町遺跡2次	松山市一番町	2006. 6.19 ~ 2007. 3.30	江戸時代後期	最高裁判所(松山地方裁判所増築)
南予	14	角ヶ谷城跡2次	宇和島市三間町曾根	2006. 7.10 ~ 2006. 8.31	中世	国土交通省(四国横断道建設)

1 「縄文土器復元!!」^{かみぶんにし} 上分西遺跡

昨年度まで調査したところの整理作業を行いました。本遺跡は縄文時代後期から室町時代に至る複合遺跡ですが、今回の整理作業で縄文時代後期の遺物で新たな知見を得ることができましたので紹介したいと思います。

縄文土器は調査区の最下層遺構面で見つかりました。明確な遺構は検出することはできませんでしたが、後期縄文土器が出土する包含層を広くわたって確認することができました。こうした包含層の広がりの中には縄文土器が集中して出土するところもありました。出土した縄文土器は、肥厚した口縁部に文様を集約させることを特徴のひとつとする「縁帯文土器」と呼ばれるもので、後期中葉(今から約4200年前)に位置付けることができます。出土した縁帯文土器には、個体として復元できるものが多く含まれていることがわかりました。その中には上半部がほぼ完全に復元することができる深鉢もありました。

残念ながら遺構を見つけることはできませんでしたが、こうした縁帯文土器の出土状況は調査区内あるいはその周辺に縄文時代後期の集落があったことを物語っています。



縄文土器出土

2 「九州から来た弥生の海人と中世の地鎮」^{かみぶんのりやす} 上分乗安遺跡

今回の調査では幅約50mの範囲に弥生時代後期から平安時代にかけて流れていた流路群が見つかり、たくさんの土器が出土しました。さらに流路群の東側には弥生時代後期の^{たてあなじゅうきよ}堅穴住居や古代(奈良～平安時代)の^{ほったてばしらたてもの}掘立柱建物が、そして西側では中世(鎌倉～室町時代)の掘立柱建物に伴う柱穴群が見つかりました。

弥生時代後期後半の方形堅穴住居からは^{かっせき}滑石製と思われる^{ゆうこうせきすい}有溝石錘(漁で使う石のおもり)が出土しました。この石錘は「九州型石錘」と呼ばれているもので、同じ形のもの、九州以東での出土例はほとんど確認されていません。今回出土した石錘は、持ち込まれたものか、あるいは同質



九州型石錘出土

の石材を選んで原型に忠実にこちらで作ったものと考えられます。いずれにしても北部九州の^{かいじん}海人集団が関与していた可能性が高く、広域な交流の実態や海人の活動を検討する好資料になります。

中世の掘立柱建物に伴う柱穴は約1100穴におよんでいます。見つかった柱穴の中には、柱を抜き取った穴に土師器皿などの中世土器を^{まいのう}ていねいに埋納しているものが30例以上見つかっています。こうした出土状況は^{じちんさいし}地鎮祭祀を行った結果と考えられ、この集落では抜き取り柱に対する地鎮行為が少なくとも30回以上行われていたことが推定できます。

3 「道前平野北部における古墳時代後期の集落遺跡」長網I遺跡^{ちよあみ}2次



竪穴住居が見つかったようす(手前がSI14)

長網I遺跡は、縄文時代から中世までの複合遺跡で、中心となるのは古墳時代後期(6世紀後半)の集落です。2次調査では竪穴住居24棟、掘立柱建物6棟が見つかりました。以前行われた1次調査と、隣接する長網II遺跡も同じ時期の集落と考えられ、全部で竪穴住居が39棟、掘立柱建物が10棟になり、道前平野では最もまとまって調査が行われた集落遺跡です。

この集落の特徴としては、50年程度の短期間に営まれたということ、ほとんどの竪穴住居にカマドをそなえていて、廃絶時に祭祀が行われていること、集落内で鉄器生産を行っていたことなどがあげられます。

竪穴住居のうち、SI14は1辺が約8m、面積が推定60m²以上あり、同時期の住居の中では県内最大級です。また、鉄滓^{てつさい}*1や鞆羽口^{ふいごはぐち}*2がまとまって出土したため、鉄器生産と関係した住居と考えられます。カマドは壊されていましたが、壊した後に土師器の甕や須恵器の杯を置いて祭祀を行っていました。

*1 鉄を精製するときにはできる不純物を含んだ鉄くず

*2 鍛冶炉に風を送る送風管の先に付ける土製の管

4 「道前平野北部の後期古墳」世田山4号墳^{せたやま}



横穴式石室の状態

世田山4号墳は、道前平野を見下ろす世田山南東側の丘陵中腹に位置し、世田山古墳群に属する古墳時代後期の古墳です。墳形は径12.5mを測る円墳で、埋葬施設には横穴式石室をもち、石室は西に向いて開いていました。過去に盗掘にあったこともあり、横穴式石室の上部は無くなっていました。また、石室内は床面近くまで攪乱が及んでおり、中に置かれていたと考えられる棺や副葬された当時の状況はあまりよく残っていませんでした。

石室の内部に残っていた遺物は、須恵器、鉄器、玉類があります。須恵器は杯蓋と杯、甕が出土しましたが、杯蓋と杯には時期の

異なるものがあり数度にわたり埋葬が行われたことが考えられます。鉄器は馬具や鉄鎌、刀子、鋤鉞^{かたせきせうすだま}先が石室の奥隅にかためて置かれており、玉類は滑石製白玉1点と土製小玉34点が石室の中ほどに集中していました。とくに鉄製品の馬具については、その造りから地元で生産や加工が行われた可能性があります。

世田山4号墳と今回展示にある古墳時代後期の集落長網I遺跡とは数kmと近接した距離にあり、今回の一連の調査によって道前平野の北部の古墳時代後期の古墳と集落の様子が具体的にみえてきたと言えます。

5 「道前平野北部における縄文時代と中世の遺跡」 松木池遺跡^{まつきいけ}

松木池遺跡では、縄文時代と中世の遺構や遺物がみつかりました。

主要な遺構は縄文時代の自然流路^{しぜんりゅうろ}で、後期～晩期(4000～2500年前)の土器や石器が出土しました。人の活動を示す確実な遺構は見つかっていませんが、付近には縄文時代後期の標式土器^{ひょうしき}を出土した六軒家^{ろっけんや}I～IV遺跡が存在し、また近年調査された福成寺遺跡^{ふくじょうじ}や旦之上^{だんのうえ}遺跡でも同じ頃の遺構や遺物が出土していることから、当遺跡周辺も活動の範囲に含まれていたと考えられます。

中世は、建物などは発見できていませんが、15世紀ころに作られた備前焼^{びぜんやき}の壺^{つぼ}などが出土しています。当時の遺跡周辺は吉岡荘^{よしおか}に含まれていたと推定でき、その一端を示す資料と考えられます。



遺跡全景

6 「集落から出土した銅剣」 朝倉下経田遺跡^{あさくらしもぎょうでん}

平成18年度は前年度に引き続いて1次調査区の下層と、新たに2次調査区の調査を行いました。

1次調査区の下層からは弥生時代中期末の集落が見つかり、6棟の竪穴住居^{はいき}や廃棄土坑などを検出しました。中でも竪穴住居に回りを囲まれた広場の中にある小穴のうちの一つから、穴の真ん中に剣先^{けんさき}を下に向けた状態で銅剣^{どうけん}が出土しました。銅剣は横に寝かせた状態で埋められることが普通ですので、これは大変珍しい出土状態と言えます。この銅剣は平形銅剣I式^{ひらがたどうけん}と呼ばれるもので、銅剣の形が細形銅剣→中細形銅剣→平形銅剣と移り変わっていく中で、弥生時代の中期末から後期にかけて出土するものです。朝倉下経田遺跡でも、銅剣が出土した穴の中から土器など時期を特定できる遺物は出土しませんでした。周辺の竪穴住居で弥生時代中期末の壺・甕^{たかづき}・高杯^{たかづき}などが出土していることから、銅剣もこの時期のものと考えられます。



弥生時代中期の竪穴住居

2次調査区の上層からは、中世(13世紀頃)の集落と考えられる掘立柱建物^{ほこ}2棟・墓坑^{ぼこう}1基・土坑などが見つかりました。このうち墓坑(SK10)には十数点の瓦器^{がきわん}碗や土器の杯・皿、長方形の青銅鏡^{せいどうきょう}と思われる遺物が副葬^{ふくそう}されており、当時の集落の姿を知る上で貴重な資料と言えます。また、下層からは古代(8世紀頃と10世紀頃)の掘立柱建物2棟・溝・土坑などが見つかりました。中でも8世紀の掘立柱建物は1次調査区上層の掘立柱建物と同時期の大型建物であり、古代の役所^{かんが}(官衙)に関連する施設である可能性も考えられます。

7「弥生・古墳時代のムラ」^{いっぽんまつ}一本松遺跡



古墳時代の竪穴住居

一本松遺跡は頓田川の河岸段丘と、その支流の古谷川に形成された扇状地に挟まれたゆるやかな斜面に立地しています。

今回の調査では、おもに弥生時代と古墳時代の遺構や遺物が見つかりました。

弥生時代のものでは、円形の竪穴住居1棟や土坑(素掘りの穴)などが見つかります。土坑からは弥生土器が大量に出土し、一度にまとめて捨てられたものと考えられます。さらに、それら弥生土器に混じって分銅型土製品も出土しました。分銅型土製品は祭りをを行う時に使われたものと考えられていますから、この土坑もお祭りに関するものとも考えることもできます。また、柱穴の中からは県内でも珍しい^{だせいせつけん}打製石剣も

出土しています。これらは、二千年前頃(弥生時代中期)のものと考えられます。

古墳時代のものでは、竪穴住居が5棟見つかりました。どの住居も地面を正方形に掘り^{くぼ}窪め、4本の柱で屋根を支える建物ですが、そのうちの1棟は一辺が7mと、他の4棟が4m前後であるのに比べて大型です。住居からは土師器や須恵器などが出土し、これらの土器から住居の時期を判断するといずれも千五百年前頃(5世紀後半)のもので、一本松遺跡のすぐ南にある一本松古墳もほぼ同じ頃のもので、一本松古墳に^{ほうむ}葬られた人は一本松遺跡の^{むらおさ}村長であったのかも知れません。

8「古代の鍛冶工房跡」^{べつみょうてらだに}別名寺谷I遺跡



古代の鍛冶工房跡

別名寺谷I遺跡は、今治平野北西部の低丘陵の谷奥に位置しています。2年間にわたる調査で弥生時代から中世にかけての遺構・遺物が見つかりました。

中でも古代では、柱穴や井戸のほか、鉄製品を作るための^{かじろ}鍛冶炉や作業場を取り囲む溝が見つかりました。鍛冶炉は全部で29基あり、高熱により赤く変色して硬くなっていました。一度に見つかった例では、近畿地方を除く西日本地域でも有数のもので、大規模な鍛冶工房が営まれていたものと考えられます。鍛冶炉のすぐそばには^{ひさし}庇をそなえた掘立柱建物があり、工房あるいは鍛冶を管理する役人の住まいと考え

られます。また、出土遺物では^{ふうじけん}風字硯と呼ばれる硯や^{すずり}須恵器の杯蓋を硯として利用したもの、底に墨で文字が書かれた土師器などの文字に関するもの、^{りよくゆうとうき}緑釉陶器や^{かいゆうとうき}灰釉陶器と呼ばれる国産の陶器や中国産陶磁器などの高級品が見つかることから、役人の管理の元に鉄製品が生産されていた可能性が考えられます。また、隣の谷(別名^{べつみょうてらだに}端谷I遺跡)でも同じような鍛冶炉や^{どういん}銅印が見つかり、両遺跡の関係も注目されます。

9 「古墳時代の首長墓と古代の鍛冶工房跡」^{べつみょうほしだに}別名端谷I・II遺跡

別名端谷I・II遺跡は今治平野北西部に広がる日高丘陵に位置しています。この低丘陵に挟まれた谷奥に位置する別名端谷I遺跡では、平安時代の鍛冶炉や大型の井戸が見つかりました。発見された鍛冶炉は全部で7基あり、県内では別名寺谷I遺跡に次ぐ多さとなります。多数の鍛冶炉が見つかったことから、鉄製品の生産や加工を専門に行う鍛冶工房が存在していたことが明らかとなりました。出土遺物の中に^{えんめんけん どう}円面硯や銅印といった遺物が見られることから、別名寺谷I遺跡同様に役人の管理の元に鉄製品が生産されていた可能性が考えられます。日高丘陵周辺ではほかにも古代の鍛冶炉や^{まいてつろ}製鉄炉が見つかり、この地域は今治平野における鉄生産の中心地であったものと考えられます。



鍛冶炉

別名端谷II遺跡は、別名端谷I遺跡の北西の丘陵頂部に位置しており、古墳時代中期の古墳が見つかりました。古墳の墳丘はその大部分が失われていましたが、直径10m程の円形であったと予想されます。また、^{まいそう}埋葬施設の床からは、^{てつぼ てつけん やり}鉄斧・鉄剣(槍)・ヤリガンナなどの鉄器や^{そうしんぐ}装身具である玉類が出土しており、古墳時代の墓制を考えるうえで貴重な資料と言えます。

10 「丘陵での弥生人の生活」^{あがたずおう}阿方頭王遺跡群

今治市阿方にある阿方頭王遺跡群は、平野部へのびる低い丘陵斜面に広がる、二千年前頃(弥生時代中期)の集落です。調査の結果、^ま竪穴住居をはじめ、斜面を段状にカットした平坦部が多く見つかり、そこで人々が生活していたことが確認されました。

それぞれの遺構からは、弥生土器をはじめ石器や鉄製品などが見つかり、特に阿方頭王IX遺跡では^{だんじょういこう}段状遺構と呼んでいる平坦部(DAN02)から、日常生活に使用された弥生土器が集中して出土していることから、丘陵の中でも中心的な役割を担っていた可能性があります。そのほか、特別な^{さいし}祭祀などに用いられる^{かんじょうせきふ}環状石斧や^{ふんどうがたどせいひん}分銅形土製品なども見つかり、当時の暮らしの一端を知ることができる貴重な資料です。



出土した弥生土器

また、丘陵裾の平地には同時期の集落(^{あがたなかや}阿方中屋遺跡)が広がっていますが、丘陵での生活とは大きな違いはないことから、なぜ阿方頭王遺跡群の人たちが生活の場所に丘陵を選んだのか、残された謎もまた多い遺跡です。



中世の集落跡

11 「鎧の破片!」 郷桜井堀遺跡2次

郷桜井堀遺跡がある今治平野南部は、古代には国分寺や国分尼寺が置かれていた伊予国の中心でした。西条市から古代山城である永納山城を経由して国分尼寺へ至るルートは古代の国道(官道)である南海道が通っていたと考えられます。郷桜井堀遺跡はちょうど南海道が今治平野へ入る入口付近に位置しています。国分尼寺と考えられている場所に隣接していることから、調査前にはこれに関連する遺構や遺物が見つかることが期待されましたが、残念ながら国分尼寺に直接関連するようなものは見つかりませんでした。

調査では主に弥生時代と中世の遺構や遺物が見つかっています。

弥生時代では砂丘の上から遠賀川系土器と呼ばれる前期の弥生土器がまとまって出土しました。

中世の遺構は12世紀後半から13世紀前半頃のもので中心です。土坑や多数の柱穴が見つっていますが、調査

範囲が狭く、建物がどう建っていたかはわかりませんでした。遺物では炭化して棒のように固まった米や、柱穴から鎧の破片などがしています。鎧の破片は室町時代の腹巻きの胸板の一部と考えられ、南北朝時代以降に各地で起こった戦乱を物語るものかも知れません。

12 「重なり合う竪穴住居」 矢田大坪遺跡



重なり合う竪穴住居

矢田大坪遺跡は今治平野北部にある日高丘陵の北斜面に位置しています。矢田は浅川によって作られた細長い谷で、遺跡は丘陵が谷へ向かってせり出した小高い場所に営まれていました。

調査では縄文時代後期から中世にかけての遺構や遺物が見つかっていて、長期間にわたって人々の生活の場として利用されていたことがわかりました。

その中でも古墳時代は調査区の中だけでも17棟もの竪穴住居が見つかっています。調査区の外にも集落が広がっていることを考えると、古墳時代にはこの地に巨大なムラがあったものと考えられます。

また、調査区の南東部では古墳時代後期という比較的短い期間にもかかわらず、ほとんど同じ場所に何度も竪穴住居が立て替えられていて、都合11棟もの竪穴住居が折り重なって見つかっています。これらの住居は人が生活していたような形跡に乏しく、遺物もほとんど見つかりません。住居を覆う土砂も、自然に流れ込んだような状態ではなく、人の手でわざわざ埋めたような状態でした。生活するために建てられた普通の家とはずいぶん趣が異なっています。具体的にここで何が行われていたのかはわかりませんが、日常生活ではない何かの目的のために竪穴住居を造り、その目的が達成されるとすぐに埋め戻されるという行為を何度となく繰り返していたようです。

13 「江戸時代の武家屋敷」^{ばんちやう} 番町遺跡2次

本調査では江戸時代の生活面(文化層)が3面確認されました。それぞれの生活面からは、土坑や柱穴、溝などの遺構が確認され、これらに伴う多くの遺物も出土しました。

遺構には土師器皿を大量に埋納した土坑がありました。このように江戸時代の土師器皿がひとつの遺構から多量に出土した例は県内では少ないようで、中世からの土師器皿の系譜を考える上で貴重な資料となります。さらに、池と考えられる遺構も確認されており、調査区の一部が庭園として機能していた可能性を考えることができます。また、瓦質の土管を連結して埋設したものがあり、これらは暗渠(地下水路)として機能していたものと考えられます。



土師器皿の埋納土坑

出土した遺物の多くは陶磁器や土師器などで、このほかにも玩具(おもちゃ)^{がんぐ}として用いられた土製品、瓦、石製硯、漆器やクシなどの木製品、金属器などが大量に出土しています。陶磁器類には伊万里系や唐津系のものが含まれ、これらは18世紀段階のものが多いようです。

古くから残されていた松山城周辺の絵図^{えず}には、番町遺跡の場所に武家屋敷の存在を示す記録がありますが、発掘調査によってこれを確認することができました。また、土師器皿の埋納土坑やゴミ穴から出土した大量の遺物は、当時の生活文化を考える上で貴重な資料となりそうです。

14 「意外なところから郭が...」^{かくがたにじやうあと} 角ヶ谷城跡2次

角ヶ谷城跡は宇和島市三間町(旧北宇和郡三間町)の三間盆地西端に築かれた中世の山城です。角ヶ谷城跡は盆地から宇和島へ下る宇和島街道の峠近くに位置し、また、城からは三間盆地を一望することができます。今回の発掘調査は平成17年度に行った城の東端部の調査に続く2回目の調査となります。

今回の調査区は城の中心施設である山頂の郭(第1郭・第2郭)の西側斜面にあたりますが、事前の地表面観察(縄張り調査)では何も確認されていませんでした。

発掘調査の結果、斜面の上下で郭を検出しました。中でも上段の郭(第3郭)はごく浅い谷を利用して造られたもので、郭の両袖部分は岩盤を削って平坦面を造り出し、余った土砂を斜面の下へ押し出して盛土し平坦面を広げる構造となっていました。さらにこの平坦面では雨落ち溝と半間分の庇をそなえた掘建柱建物が見つっています。また、この第3郭は砕かれた岩が含まれた土砂に分厚く覆われていましたが、この土砂は山頂の郭(第1郭・第2郭)やその切岸を造った時にでた土砂以外には考えられないことから、山頂の郭が造られる以前に、山頂以外にも郭などの施設をそなえた古い段階の城が存在していた可能性が考えられます。



第3郭

